

農業の登録内容は頻りに変更されます。農業は最新情報を確認して使用しましょう。最新情報は府・農の普及課、JA、Web版大阪府農作物病害虫防除指針 (<http://www.jpnp.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html>) から。農産物の病害虫発生予防については大阪府環境農林水産部農政室推進課病害虫防除グループ (<http://www.jpnp.ne.jp/osaka/>)

営農総合センター 営農指導課 (072-444-8001)



野菜

たまねぎ

◆施肥
早生種は1月中旬下旬が2回目の追肥の時期である。いずみの化成(8・8・8)で50〜70kg/10aを施す。

◆中耕除草
土を軟らかくし、肥大促進、品質向上を目的に、追肥時に中耕除草をする。その際、たまねぎ

表1 たまねぎに登録のある主な除草剤

薬剤名	10a当たりの農業使用量	10a当たりの散布液量	使用方法	使用時期	使用回数
トリアノサイド乳剤	200〜300ml/10a	100ℓ/10a	全面土壌散布	定植後(ただし収穫75日前まで)	2回以内
クロロIPC(クロロIPC乳剤)	200〜300ml/10a	70〜100ℓ/10a	全面土壌散布	定植活着後または中耕後(ただし収穫90日前まで)	2回以内
ゴゴサン乳剤30	300〜500ml/10a	70〜100ℓ/10a	全面土壌散布	定植後(雑草発生前)(ただし収穫60日前まで)	1回
ホーネスト乳剤	75〜100ml/10a	100〜150ℓ/10a	雑草茎葉散布	雑草生育期(イネ科雑草3〜5葉期)(ただし収穫14日前まで)	2回
セレクト乳剤	50〜75ml/10a	100ℓ/10a	雑草茎葉散布	雑草生育期(イネ科雑草3〜5葉期)(ただし収穫21日前まで)	3回以内

表2 たまねぎの病害に登録がある農業

病害名	薬剤名	希釈倍数	使用時期	使用回数	10a当たりの散布液量
べと病、白色疫病	リドミルゴールドMZ	1000倍	収穫7日前まで	3回以内	100〜300ℓ/10a

表3 キャベツの菌核病に登録がある農業

薬剤名	希釈倍数	使用時期	使用回数	10a当たりの散布液量
ベンレート水和剤	2000倍	収穫7日前まで	6回以内	100〜300ℓ/10a
ロプラール水和剤	1000倍	収穫7日前まで	4回以内	100〜300ℓ/10a

ぎの根はできるだけ切らないように軽く行なう。

中耕後に除草剤を使用する場合は表1の薬剤を使用する。土壌処理除草剤の散布は、土壌が乾燥していると効果が劣るので、適度に湿っている時に行なう。スズメノカタビラなどのイネ科雑草が多い場合には茎葉処理剤の効果が高い。

◆病害虫防除
べと病・白色疫病は気候が温暖で雨が続きと発生しやすくなる。排水路を整え、過湿にならないように注意する。発生初期には表2の薬剤で防除を行なう。

キャベツ

◆収穫
1〜2月は、松波を中心とした泉州キャベツの収穫最盛期を迎える。収穫が遅れると裂球するので、適期収穫に努める。

◆病害虫防除
雨による過湿条件が続くと菌核病が発生しやすいので、うね間の排水に注意するとともに、発生を認めたら

ら、発病株をほ場の外に持ち出して処分する。薬剤防除については表3を参照し、適期防除に努める。



軟弱野菜の露地栽培

1月下旬〜2月上旬は年間で最も寒い時期となる。凍害等で品質が悪くなるのを防ぐため、必要に応じて、霜よけや保温資材(寒冷紗、不織布)を活用する(例①〜③)。

- ① 1mm目の寒冷紗やプラスチックなどの不織布のべたがけ
 - ② 透明ポリ、塩化ビニールのトンネルがけ
 - ③ 透明ポリ、塩化ビニールのトンネルがけ+不織布のべたがけ
- ただし、被覆すると中の様子が見えにくくなり、病害虫の発生等に気付くのが遅れることも多いため、注意する。

果樹

果樹全般

◆樹勢の回復
近年、果樹全般に樹勢が低下

している樹が増えている。樹勢の低下している園では、たこ壺施肥による下層土壌の改良や、客土・堆きゅう肥の施用により、樹勢の回復を計画的に行なうと良い。

◆せん定時の切り口のゆ合促進

せん定整枝時や病枝切除直後にできた太めの切り口には、ゆ合促進のため速やかにトップジンMペーストを原液で塗布する。

◆園内清掃

病害虫の発生を抑えるため、落ちた果実や枝葉は、園外で処分し、園の病原菌や害虫の卵、幼虫、蛹、成虫の密度を下げておく。

◆みかん

◆越冬病害虫の防除

12月中旬〜1月上旬にハーベストオイル(60〜80倍/10a当たりの散布液量200〜700ℓ)を散布する。この散布により、ミカンハダニやカイガラムシ類の発生を抑えることができる。

ただし、ハーベストオイルは、油膜でダニ類を窒息させるため、葉裏まで丁寧に散布する必要がある。また、ハーベストオイルは樹を油膜で覆い、樹の呼吸を抑えるため、樹勢が弱った樹に

は3月中旬に80倍で散布すると良い。

◆中晩柑類の収穫と貯蔵

はつきく、ネーブル、清見、不知火(デコポン)等の中晩柑類の完熟期は2〜3月だが、袋かけ栽培をしないときは、凍害や寒風害による果皮障害の危険性がある。

そこで、被害を受ける前の1月上旬までに収穫貯蔵して追熟させる。収穫後は風乾して果実重を3〜4%程度減少させる予措作業を行なう。

なお、暖冬の時はみかんを含め腐敗果が多発しやすくなるので、貯蔵時には傷果がないか十分にチェックする。



◆もも

密植園では、日当たりを改善する意味で間伐を計画的に行なう。また排水の悪い園では、溝切りや暗きよ排水等を行なう。

◆土壌改良

もも園の土壌が中性近くからアルカリ性(PH6.5以上)

*農薬名の後の括弧内は、(希釈倍数/散布液量)を表示しています。

◆せん定

せん定は2月下旬頃までに、前年の結果枝基部の芽が欠けていないことを確認し、1〜2芽残すようにせん定をする。

残す芽のすぐ上で切ると切り口が乾燥して亀裂がでやすくなるので、新梢の伸びが悪くなるので、そのため残す芽の少し上で切る。

なお、若木で枝を長く残す場合は、登熟していない緑色の部分は切り落とすようにする。

キッチン防災術

食文化・料理研究家 ● 坂本佳奈

鍋でご飯を炊く



母も祖母も、お米さえあれば災害があっても、いつでも安心だと言っていました。常温で保存ができ、炊けば腹持ちが良いお米は防災用品としても欠かせないようです。非常時も、1合(180ml)や半合を時間をかけて炊くよりも、2〜3合まとめて鍋で炊いてしまおう方が燃料の節約になります。1合は重さで150g、ご飯になると350gぐらいになります。お茶わんに盛って150gぐらいです。1合はだいたいお茶わん2杯分と少し余り、となります。2合炊くと、お茶わん4杯から5杯のご飯が炊けます。2合の鍋にご飯に必要なのは、容量が2ℓぐらいのふた付き鍋、水です。

歌を一つ覚えてください。「始めちよろちよろ、中ぱっぱ、ジュウジュウいつたら火を引いて、赤子泣いてもふた取るな、最後に藁を一握り」を、「ごんぐりころころ」の曲に乗せて歌います。そしてその通り炊いていくと、あら不思議、ご飯が炊けます。

この歌の意味は、鍋が温まるぐらいまでは弱火、鍋が温まったら強火にして中の水が一筋こぼれるぐらい吹き上がったら、火をこく弱火にして10分、最後にいったん強火にし30秒。最後に藁を一握りとは、薪でご飯を炊いていた頃、最後に藁をくべて短い時間強火にすることです。そしてそこからふたを開けずに10分くらい蒸らしませす。

ガス、電気(IH)、薪など、熱源は水を沸騰させることができるならば何でも構いません。使う鍋もできれば底が分厚く熱が均等に伝わる物がいいのですが、ふたがキッチリできれば大丈夫。平時に、ぜひ一度、鍋ご飯を炊いてみてください。意外と簡単です。

もし失敗して芯のあるご飯ができたときは、耐熱容器に移し、水を50mlほど入れて、ラップをして電子レンジにかけます。硬いときは炒めてチャーハンに、軟らかくなったら炊き直しましょう。